

平成 23 年 3 月 1 日現在

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007 年度 ～ 2009 年度

課題番号：19592600

研究課題名 (和文) 統合失調症患者の自我強化のための看護面接の方法に関する信頼性と妥当性の検討

研究課題名 (英文) An examination of reliability and validity of nursing interview method for ego strengthening among people with schizophrenia

研究代表者 阿保順子 (ABO JYUNKO)

北海道医療大学 教授

研究者番号：30265095

研究成果の概要 (和文)：本研究は、統合失調症患者の自我強化のための看護面接方法の信頼性と妥当性を検証したものである。面接指標 (「不確かな自己」「発達課題」「ライフイベント」「身体感覚の違和感と自己の関係に関する洞察」) にそった面接を実施した 5 名の回復過程と面接結果を照合した結果、それぞれ回復したと評価できた。面接指標は、①ES 得点が低い場合の面接は「ライフイベント」と「発達課題」がポイントとなること、②退院後 3 か月目は再燃の危機であるが刺激のレベルと生活の縮小を支えることで乗り越えられる可能性があること、③寛解期後期の乗り越えには将来への不安について具体的にともな解決策を考えてその実施を指示することが重要であることが示唆された。面接指標にそった面接による再燃予防については、再燃したケースとの面接が実施できず検証はできなかった。しかし、再燃した患者を対象とした過去の回復過程で受けていた援助内容を分析した結果、再燃した患者は面接指標のいずれかについて課題を抱えているにもかかわらず、これらについて相談する相手もないまま再発していたことがわかった。さらに、新たな指標として「対象者特有のライフイベントの存在を見いだすこと」が見いだされた。以上、上記の 4 つの指標に加え、今回見いだされた「対象者特有のライフイベントの存在を見いだすこと」を含めた 5 つの指標にそった統合失調症患者への看護面接は、患者の自我を強化し、回復過程を促進するために有効であることが検証できた。今回は CNS 教育を修了した看護師が面接を行っているが、多くの外来で実践するためには、これらの指標に沿った看護面接の実践能力を育成する取り組みが課題である。

研究成果の概要 (英文)：This study examined reliability and validity of nursing interview methods for ego-strengthening among schizophrenic patients.

The result of analyzing the relationship between the nursing interviews based on the interview indexes ([the uncertain self] [the development task] [life event] [the insight into the relationship between an uncomfortable feeling towards physical sense and self]) and a recovery process of 5 patients who were provided the interviews showed a promotion of their recovery. The following points were indicated as an important for

the interview indexes; ①[life event] and [the development task] was important points when interviewing with patients who had low ES scores, ②Three month after patients discharged from hospital was the moment of crisis for relapse but it was possible for them to overcome the crisis by having supports for controlling the level of stimulation and reducing their living area, ③it was important for them to overcome the late remission period that nurses considered concrete solutions for their future worries together with them and provided suggestion to achieve them. It was not able to examine relapse prevention by providing interviews based on the indexes because of unable to interview with cases who were relapsed. However, it was found that patients were relapsed without anybody to talk with although they had difficulties in any of interview indexes by analyzing supports provided to patients who were relapsed in their past recovery process. Furthermore, [to discover an existence of participants' unique life event] was found as a new index.

From above results, nursing interviews for schizophrenic patients based on 5 indexes including [to discover an existence of participants' unique life event] found in this research was effective to promote their ego-strengthening and recovery. In this research, the interviews were provide by nurses who completed CNS training course, therefore there is a need to make an effort to develop an ability of performing the nursing interviews based on these indexes in order to practice them in outpatients wards widely.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合 計
2007年度	1500000	450000	1950000
2008年度	1000000	300000	1300000
2009年度	600000	180000	780000
総 計	3100000	930000	4030000

研究分野：

科研費の分科・細目：

キーワード：統合失調症患者の看護 再発予防 看護面接 自我強化 生活体験

1. 研究開始当初の背景

統合失調症患者の急性期の看護援助の方法は、学問的に明らかにされてきており、臨床現場にも適用され効果をあげつつある。しかし、病院の機能分化によって、急性期の入院期間は3ヶ月に限定されているため、その

後の再燃が多く、結果的に再入院をするという、いわゆる回転ドア現象が問題になっている。報告者らは、その防止に向けて、平成15年度から17年度までの助成（「統合失調者患者の早期退院後における自我強化の方法—本質的な生きにくさ・生活体験・自我へ

のフィードバックをキーワードにして」を受けて、初発の統合失調症患者の回復期の看護援助の要諦を彼らの自我強化におき、外来やデイケアでの看護面接を過去3年間にわたって実施してきた。その結果、看護面接の指標として以下のことが見いだした。

- 1) 患者の「不確かな自己」への支援を面接の根底に据えること。
- 2) 彼らの生きにくさは、回復過程のプロセス、ライフサイクル上の出来事、発達課題、個人のライフイベントの影響を受けするため、これら4つを確認しながら進める必要がある。
- 3) 退院直後の Ego Strength 得点で、35点以下の場合には、個人のライフイベントと発達課題を中心に、また50点以上の場合には、ライフサイクル上の出来事を中心にした面接を行うことが効果的である。
- 4) 回復過程の全期間を通じて、身体感覚の違和感と自己の関係について洞察できるよう支援する必要がある。
- 5) 回復過程の後期(寛解期後期)を確認し、将来への具体的な不安に向けて、ともに解決策を考え、その実施について支持することが重要である。
- 6) 退院後2ヶ月目と3ヶ月目の面接においては、刺激のレベルを確認し、強い場合には生活の縮小化をはかるよう促す。
- 7) 退院後1年から1年半の間は1ヶ月に1回の面接を行い、万能感や高揚感を確認し、過活動を抑制できるよう支持することが必要である。

これらの指標に沿った看護面接の信頼性と妥当性を検討することが今後の課題である。

2 研究の目的

本研究では、指標に沿った看護面接の信頼性と妥当性を検討する。検証のための具体的

な研究課題を以下の4点とした。

1 指標に沿った看護面接によって統合失調症患者の回復過程が促進されるか

2 指標に沿った看護面接によって再燃を予防できるかどうか。

3 再燃・再発した統合失調症患者が回復過程で受けていた看護援助の内容と、上記の面接指標との照合。

4 新たに発見される指標

3 研究方法

1) 研究期間

看護面接は、X年4月～X+1年9月までの1年5ヶ月間にわたって実施した。

2) 各研究課題の検証方法

研究課題1) について

(1) 対象者：早期(入院後3カ月前後)退院した初発の統合失調症患者5名。

(2) データ収集方法：

①看護面接記録をデータとした。なお、面接は、以下の面接指標に沿って実施する。

*回復過程を確認し、プロセスに沿った面接を行う。

*「不確かな自己」「ライフサイクル上の出来事、発達課題」「個人のライフイベント」「身体感覚の違和感と自己の関係についての洞察」を確認しながら面接を進める。

②自我レベルの変化を把握するために Ego Strength 得点を使用する。測定は、退院直後・3ヶ月・6ヶ月・1年の4回実施とした。

(3) 分析方法

①面接記録を質的に分析し、危機的状況を乗り越え、回復過程を確認する。

②分析した回復過程と ES 得点を照合し、自我レベルが上がっているかを検討する。

研究課題2) について

実施中に再燃したケースについて、その人の看護面接のデータを再度内容分析し、新たな要因を見いだす。

研究課題3) について

(1) 対象者：再発で入院中の統合失調患者 3名 (退院が間近な患者)

(2) データ収集方法：

①対象者への半構成式のインタビューを行う。インタビューは、研究課題1) の面接指標に沿って自由に話してもらう。

(3) 分析方法

インタビューの逐語記録から、面接指標に示す看護を受けていたかを確認する。

研究課題4) について

看護面接記録から、新たに見いだされる指標があるかを分析し、これまでの指標との関連性の有無や根拠について考察する。

3) 倫理的配慮

データ収集方法として使用される面接とインタビューは両者ともに、その内容はプライバシーに関連することが多くなることに留意し、患者とその家族、病院の責任者・看護部責任者・主治医、必要であれば外来診療の責任者らに研究内容を文書と口頭で明示し、了解をとってから進める。さらに、相談に関しては、テープへの録音は行わないこと、また、面接しながらの記録は、患者さんの了解を得られた場合に限り行うことを説明する。

4 結果

1 研究課題1) について

1) 対象者：5名

①A氏：男性・10代半、②B氏：男性・30歳代半、③C氏：女性・30歳代半、④D氏：女性・20代後半、⑤E氏：女性・50代後半

2) 面接経過

①A氏～面接回数 4回 (退院6日目～4カ月目まで)

②B氏 面接回数 18回 (退院後 16日目～12カ月目まで)

③C氏 面接回数 15回 (退院後 1ヶ月目～10

カ月目まで)

④D氏 面接回数 13回 (退院後 1週目～7カ月目まで)

⑤E氏 面接回数 10回 (退院直後～8カ月目まで)

3) 看護面接による回復過程の促進について

面接指標に沿った看護面接によって回復過程が促進されたかどうかを、カルテや看護記録、入院時のサマリー、退院後の面接記録から分析した。その結果、5名の対象者のうち、B氏は、寛解期前期に入ったものの、面接期間中、一旦臨界期に戻り、再度寛解期前期へと回復していった。他の4名については、それぞれのペースで回復過程を辿っていたことがわかった。回復過程の特定にあたっては中井の寛解過程モデル、阿保の精神構造モデルに本人の状態を照合して分析した。

4) 4つの面接指標の信頼性について

4つの面接指標について以下のことが確認できた。

①身体感覚の違和感と自己の関係の洞察は A氏・B氏・C氏の3名にみられた。

②発達課題を抱えていた人は A氏・B氏・C氏の3名であった。

③ライフイベントによって経過を左右されていたのは、D氏とE氏の2名であった。

④「不確かな自己」に関する語りは5名全員に見られなかった。このことは、面接の基本に「不確かな自己」への支援を根底に据えたことの結果と考えられた。

5) ES得点と自我レベル

各対象者のES得点は、退院直後(面接開始時点)、3カ月後、6カ月後、12カ月後に測定したが、2名については、面接が患者の事情により退院後7カ月または8カ月後の得点、1名は、面接自体4カ月で終了したためその後のES得点とはれなかった。

各対象者の回復過程と ES 得点を照合したところ、3名の ES 得点は退院後3ヶ月目で低下し、7~8カ月後には退院後よりも得点が上昇していた。

6) 面接指標の妥当性について

<ES 得点が低い場合>

35点以下の対象者が2名おり、いずれも再燃していた。ES 得点が35点以下の人の場合、再燃と再発のリスクが高いことが推測される。また、両者ともに、発達課題を抱えていること、重要な意味をもつライフイベントの存在が観察されたことから、ES 得点の低い人の場合、ライフイベントと発達課題を面接のポイントとしていくことが妥当と考えられた。

<面接ポイントとしての退院後3ヶ月目>

今回の5名において、退院後3ヶ月目という時期は、発達課題が明らかになる、家族関係の問題が表面化してくるなど、かかえている課題が表面化する時期、あるいは臨界期に逆戻りという状況が観察された。

このように、退院後3カ月という時期は、最初の再燃・再発の危機として捉えられる。したがって、この時期を看護面接によって乗り越えること、すなわち刺激のレベルを確認し、各人に沿った生活の縮小を図ることによって再燃の危機を乗り越えることが可能であり、有効であると考えられた。

<寛解期後期の乗り越えについて>

今回の研究でも、回復過程の後期（寛解期後期）において、将来への具体的な不安に向けて、ともに解決策を考え、その実施について支持することが重要であることが示された。今回の5事例では、この時期に時間感覚の回復に伴う現実感が出現しており、それが、彼らの辛さを生みだしていた。この辛さを面接のなかで吐露し、危機を乗り越えていったと考えられる。たとえば、B氏は、「最近辛い

時の思い出をはっきり思い出すようになった」とか「今になって細かいところを思い出すようになった」と、過去を回想できるようになる。さらに、面接するなかで「妄想ではなく、確実に追われていると今でも思っている」「現実に関心がないという実感もある（それが統合失調症と集団ストーカーの境目だと思う）」「妄想なのか現実なのかかわからない。両方あると自分は思っている（たとえば、ダニが僕たちを認識できないように、僕らが知らない世界もあると思う）」と自分なりに整理していた。また、D氏は、面接4回目の段階で寛解期後期に入っていると考えられ、姉の出産までの時間が理解できるようになっていた。そのため逆に落ち着かない不安定な状態になっていった。

研究課題-2) について：5名の対象者のうち1名が再発して再入院したが、退院後受診がなく、面接も不可能となった。

研究課題-3) について：再発した統合失調症患者が回復過程で受けていた看護援助の内容と、上記の看護面接の指標との照合

1) 対象者：再発により再入院した対象者は3名であった。

①F氏：20代後半・男性

前退院してグループホームに入居後、1週間で再入院となった。GHでは、他のメンバーとの交流もなく、相談する相手も時間もなく再燃していた。再燃時に自ら気づいたことは、気持ちの落ち込み、不安感、寂しさ、食欲不振だけであった。対処方法は全く思いつかず何もできなかったという。

②G氏：20代前半・女性

発達課題を抱えており、身体感覚の違和感がありながらも、そのことを話す相手がおらず、洞察できないまま再発にいたっていた。

③H氏：40代前半・男性

仕事やライフイベント、薬に関する身体感覚

の違和感がありながらも、誰にも相談することなく再発していた。

以上のように、再発者においては、4つの面接指標のいずれかに問題を抱えながらも、相談する相手も時間もないまま再発していたと言える。したがって、4項目の面接指標は、回復過程を促進する際の重要な課題であることが確認された。

4、研究課題－4)について：回復過程において、新たに発見される指標の有無。

今回の面接過程で見出された指標は、対象者特有のライフイベントの存在を見出すことである。たとえばB氏は、「仕事」という大きなことの他に、「娘に会うこと」が自らの精神内界を揺るがすこととして位置づけられていた。また、D氏は、姉が無事出産できたことによって安定していき、「姉の出産」が大きなライフイベントであったと考えられた。したがって、今後の面接の指標には、その人特有のライフイベントとして捉えられていることに注目し、それを乗り越えるための方法を一緒に考えていく必要がある。

<結論>

本研究では、「不確かな自己」「発達課題」「ライフイベント」「身体感覚の違和感と自己の関係に関する洞察」という4つの指標に沿った看護面接の信頼性と妥当性を検討した。その結果、以下のことが見いだされた。

1) 退院後も外来において継続的に上記指標に沿った看護面接を実施することによって、統合失調症患者の回復過程が促進されることが示唆された。

2) 面接指標を活用する際には、ES得点を目安に、低い場合は、「ライフイベントと発達課題」を面接のポイントに据えること、再燃・再発の危機としての退院後3カ月とい

う時期での対応が必要であること、回復過程の後期（寛解期後期）での将来への具体的な不安に向けての対応が重要であることが示された。

3) 再発した統合失調患者が過去の回復過程で受けていた看護援助を分析してみたところ、再発者は、これらの指標のいずれかに問題を抱えながらも、相談する相手も時間もないまま再発していた。

4) 今回あらたに見いだされた指標は、「対象者特有のライフイベントの存在を見出すこと」であった。

5. 研究組織

(1)研究代表者

阿保順子 (ABO JYUNKO)
長野県立大学 看護学科 教授
研究者番号：30265095

(2)研究分担者

佐久間えりか (SAKUMA ERIKA)
北海道医療大学看護福祉学部 準教授
研究者番号：60265098

笹木宏美 (SASAKI HIROMI)
北海道医療大学看護福祉学部 講師
研究者番号：20275499

吉野賀寿美 (YOSINO KAZUMI)
北海道医療大学看護福祉学部 助教
研究者番号：70433430

岡田 実 (OKADA MINORU)
青森学院大学看護学部 準教授
研究者番号：20438435